井伏鱒二全集

第七卷

筑摩書房

井伏鱒二全集第七卷

昭和四十二年八月二十日發行

著者　井伏鱒二

發行者　竹之內靜雄

東京都千代田區神田小川町二ノ八

發行所　筑摩書房

電話東京(291)七六五一(代表)

振替　東京　四一二三

印刷　株式會社　精興社

製本　和田製本株式會社

目

次

上脇進の口述……三
先輩……二〇
河童騒動……三三
御隠居さん……五二
リンダウの花……六八
木靴の山……八〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

釣師・釣場……三四五
解　題……四九五

井伏鱒二全集　第七卷

上脇進の口述

上脇君は數年前に亡くなつた。生前はロシヤ文學の飜譯をして、それも主に代譯をして暮してゐた。ロシヤ語の會話がうまいので、戰爭前には暫く陸軍に徵用されて、滿洲かシベリア國境方面かに行かされてゐた。ずつと前にシベリア出兵のときにも、軍徵用の通譯としてウラジオに行つてゐたさうだ。私が知りあひになつたのは、上脇君が滿洲から歸つて一年か一年半ぐらゐ後だつたと思ふ。

酒が好きな人であつた。醉ふと笑ひ上戸になりかけたやうに、にこにこ笑ひながら話をした。ドストイエフスキーについては、いろんな意見を持つてゐた。自分はドストイエフスキーの隱れた研究家をもつて自任すると云つたことがある。ボルガの舟曳唄といふロシヤ語の歌を大きな聲で歌ふこともあつた。

この人の亡くなる前の年であつたと思ふ。あるとき私のうちにやつて來て、兒玉花外についてながながと話してくれた。何かのきつかけで、明治時代に活躍してゐた詩人たちのことが話題になると、

「兒玉花外なら、僕は個人的によく知つてゐるよ。あの人、明治大學の『白雲なびく駿河臺』といふ校歌を

つくつた。あの作詞をしたころの、あの人のことなら知つてゐるよ。」

さう云つたので、兒玉花外のことを纏めて口述してもらひながら私はテープに錄音した。そのときの上脇君は以前に較べてずゐぶん酒量が減つてゐた。

次のやうな錄音だが、ここでは詩人以外の人は假名にして、しかし幾らか似たやうな名前にして書取ることにする。

花外さんが「白雲なびく」を書いたのは、たしか大正十一年か十二年ごろではなかつたかと思ふ。僕が道灌山下の喫茶店を根城にしてゐたころのことだ。大正十二年だつた。花外さんもその喫茶店によくやつて來て、コップ一杯十錢の燒酎を飲んでゐた。そのころ、年は五十前後だつたらう。言葉通り、うらぶれた詩人で、身なりなんかちつともかまはない。だから年にしては老けて五十七八歲ぐらゐに見えた。しかし、いい顏だちだつた。

その喫茶店は、假にアルバイテンといふ名前にして置かう。道灌山下の、そのころ開成中學校のあつた隣に、若い貧乏詩人や貧乏畫家が協力して、素人の手で建てた貧弱なバラックの店だ。僕もその協力者の一人だが、みんな協力しながらの共同經營で、店內の裝飾も自分たちでやつた。客は主に學生だつた。

僕らの仲間のうち、詩を書いて雜誌に發表してゐた詩人は一人もゐなかつた。僕はロシヤ語の代譯をしてゐたが、食ふや食はずの貧乏だ。畫家たちは、本鄕あたりの湯屋で浴槽の背景を描いてゐたのもあるし、國技館の納涼パノラマの背景を描いてゐるのもあるし、そのなかには後年知名な某女史と結婚した蘆塚もゐた。

太平洋戰爭で戰死した大村もゐた。

アルバイテンといふ店は、土間が四坪、奥が三疊間一部屋、臺所が一坪で、仲間の者がみんな寢泊りすることは出來ないから、詩人が一人に畫家が一人、三疊間に泊つてゐた。他の者は近所の下宿屋に分宿して、たいてい他用のない限り朝からアルバイテンに詰めかけてゐた。店の經營者として精勤するためではない。下宿代を拂へなくて下宿屋が食事を出してくれないので、自分の店のトーストやミルクを傳票で手に入れるためだ。朝のうちは煙草を喫ふのも我慢してゐるのだ。やがてお晝ごろお客がやつて來て、トースト代やミルク代を十錢か二十錢か置くと、いち早く誰かが裏口から煙草を買ひに走るといつた風であつた。

店内には、いろんな詩人の色紙や短册を板壁に貼りつけてゐた。今でも覺えてゐるのは、福田正夫の書いたものと、店の常連だつた兒玉花外の書いたものだ。花外さんのは二枚あつた。

木枯は　その夜より
吹きそめたるぞ

これは福田正夫の書いた色紙だ。兒玉花外のは、一つは詩の一節。

晝來し墓地の側の
畠につきし一筋の
田鼠(もぐら)の跡をとひみれば
夜風は枯れし草吹きて
魂魄(たましひ)さそふ響あり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

花外さんの初期の作で、「ゆく雲」といふ詩集に入れてある「闇中田鼠に告る歌」といふ題の詩の一節ださうだ。現代の讀者感覺から云ふと、いろいろ說が出るかも知らないが、この詩は兒玉花外が最も活躍してゐた明治三十何年ごろ作つたさうだ。當時、花外さんの傑作の一つとして數へられてゐたものだと誰かが云つてゐた。僕なんか、まだ小學校へあがる前のことだ。いつか福田正夫さんから聞いた話だが、花外さんが「ゆく雲」を出した當時、日本の詩壇では舌ざはりのいい甘味のある語句を並べることが流行つてゐた。詩といふものは、語呂の上から云つて甘味がなくちゃいかん。その觀念が壓倒的に行き渡つてゐた。世を擧げてそれが大流行だつた。しかし花外さんは技巧を全然無視してゐた。悲憤慷慨の詩もつくつた。垢拔けした語句など見向きもせずに、感じたままを在りあはせの言葉で出さうとして、それを押し通してゐるうちに世間から忘れられた人ださうだ。無器用と云ふことは詩の批評の場合は避けたいが、無器用といふ評語を持ち出すつもりなら、花外さんの生活の仕方に差向けたらいいやうだ。無器用を通り越して生活は破滅的であつた。

花外さんがアルバイテンで「田鼠に告る歌」を書くときには、醉つてゐなかつた。夕方ごろ肩を窄めて店にやつて來て、しよんぼりした恰好で燒酎を飲みたいと云つたので、店番してゐた僕は「ぢや、私が御馳走します」といつて燒酎をコップについで出した。花外さんがそれを半分ぐらゐまで飲むと、僕は燒酎をつぎたして、「お願ひがあるんです。揮毫です。有名な田鼠に告る歌を書いて下さい」と云つて色紙と硯を出した。

詩人といふものは自分の代表的作品なら暗記してゐるらしい。少し醉ひのまはつた花外さんは口のうちで

何やら呟いてゐたが、僕が重ねて催促するまでもなく筆を執つてすらすらと書いた。書いた後で、ちびりちびり燒酎を飲んで、二杯目か三杯目を飲みほすと、僕が壁に貼りつけた色紙を見ながら朗吟した。實にいい聲だから驚いた。

その晩、花外さんは他の若い客から燒酎をたくさん奢られて、べろべろに醉つて短册にまた揮毫した。詩か川柳か何か知らないが、僕はその文句に感心できなかつた。全くひどいと思つた。

酒は正宗　肴は鮪　男は度胸だ
どんと來い

僕がこの短册を壁に貼りつけると、その文句は花外さんが秋田の魁新聞にゐたとき、吉井勇が冷かしの短歌を贈つてよこしたので、返歌のつもりで贈つた詩だと說明した。ところが花外さんが、そんな氣焰をあげてゐると、いつの間にかその短册の横に誰だか白墨で落書をした。

飲んで兒玉きや
なほ花外

そのとき店に來てゐた若い學生が書いたんだらう。この語呂あはせのやうな文句は、それより前、僕はどこかで讀むか聞くかしたやうだ。僕らの仲間の大村は、こんな文字の上の遣りとりは好かないから消すのだと云つた。しかし仲間の蘆塚が、そのままにして置けと云つたので消さなかつた。

そのころ花外さんは僕と同じ下宿にゐた。アルバイテンの近くの素人下宿の二階だが、花外さんは奥さん

も子供もなくて身寄もなかつた。部屋は二階の端の四疊半で机も本箱もない。座蒲團は枕にするため二つに折つて、風呂敷を卷いて押入に入れてあつた。僕は一度、花外さんが羽織を質に入れると云つて押入を明けたとき、綿の食み出てゐるその座蒲團を見た。いつも部屋のなかにあるのは柳行李が一つきりで、原稿を書くにも手紙を書くにもそれを机の代りにして、袖のなかから取出す鉛筆で書いた。鉛筆は、いつ見ても短く禿びてゐた。やつと指先で取扱へるくらゐ寸づまりになつてゐた。それを削るときには、柳行李から二つ折りのナイフを出して、窓のところに行つてゆつくり削つた。窓敷居にこぼれた削屑は、きまりきつたやうに息を吹きかけて消しとばしてゐた。だらしない暮しかたのなかで、ごく小さなことだけ遣りつぱなしにしない。神經衰弱病者のやうなところがある。傍から見てゐて却つて荒涼の氣が迫つて來る。うらぶれた老詩人のたたずまひが現にそこに見られるが、いつもながら僕は、そこに男やもめの孤獨の權化體がゐると思つたものだ。

朝は十時ごろまでたいてい寢床のなかにゐた。或る朝、珍しく階段をあがつて來る女中の足音がして、花外さんの部屋の前で「お客さんです。お通ししました」と云ふ聲がした。八時か九時ごろだつた。「ちよつと待つてもらつてくれ。誰だね」と云ふ花外さんの聲がした。

僕はアルバイテンへ出かけるので、もう顏を洗つて、田舍の妹が送つて來た早生桃を朝飯の代りに食べてゐた。僕の部屋は花外さんの部屋のお隣だから、それに安普請の家だから話し聲が筒ぬけだ。お客は三人、どれも聲が若々しい。話の樣子では、一年前に花外さんが東北の或る高等學校の校歌を作つて、その作曲が出來あがつたので全校生がそれを練習し、三人が代表して作詞者を訪ねて來たところだとわかつた。作詞者

の前で、これからその校歌を歌はうと云ふ。

花外さんは殆どその歌詞を忘れてゐたらしい。

「うん、青春の血潮。さうだ、青春の血潮、高鳴りて、だな。うん、さうだ。」

「では、これから歌ひます。」

「うん、大きな聲で歌つてくれ。青春の意氣、高らかに歌つてくれ。」

「はい、歌ひます。」

僕は階段を降りながら、花外さんが「ちよつと待つた。蒲團を片づける」と云つてゐるのを聞いた。しかし花外さんはいつも蒲團を片づけるのに、ゆつくりたたんで、大儀さうに押入のなかに仕舞ふ人だ。動作がのろい人だ。僕が桃の食べ滓を裏口の芥溜に放りこんで、石だたみの路地から大通りに出て行くときにはまだ歌聲が始まつてゐなかつた。

その日、僕はアルバイテンの土間掃除をして、それから雜司ケ谷の先輩のところへ飜譯の仕事の世話をしてもらひに出かけて行つた。先輩は「ちやうどいいところへ來た。實は或る人から、ロシヤ文の飜譯する人を見つけてくれと、頼まれてゐたところだ」と云つて、西大久保のロシヤ文學者に宛てて紹介狀を書いてくれた。

「氣難しい人だからね、その先生は。楯つくやうな口をきいちやいけないよ。萬事、はい左樣ですか、といふ程度にして置くことだ。職人になつた氣持になることだ。」

雜司ケ谷の先輩はそんな入れ知惠をしてくれた。

西大久保の先生はロシア文學者として有名な人だから、僕は名前をよく知つてゐたし、顔も雜誌に載つた寫眞で見て知つてゐた。頭が禿げて强度の近眼鏡をかけてゐた。氣難しくて癇癪もちだといふ噂も聞いてゐた。實際に會つた上の感じでは、もし自分が正直に仕事をして行く限り、人のいい小父さん程度にこちらをあしらつてくれさうな好人物に見えた。氣性が强さうなのは、强がりにすぎないやうに思はれた。先生は紹介狀を繰返して讀んでゐたが、

「よろしい、君に賴みます。しかし飜譯してもらひたいのは、僕の知つてゐるポポリェフといふ評論家の書いた生原稿です。文學論だがね。」

さう云つて、ロシヤ語で書いた原稿を出して來た。飜譯すれば、枚數にして百五十枚ぐらゐになる大體の見當だつた。先生の口吻だと、飜譯原稿は出版するのでなくて先生が何かの參考にするためらしかつた。だから稿料は代譯並みといふことだつた。

僕に異存はなかつた。それでポポリェフの生原稿を持つて歸らうとすると、先生は「その原稿、絕對に無くさないやうにしてくれたまへ」と、風呂敷に包んで、僕を神樂坂の鳥料理屋へ連れて行つて夕飯を御馳走してくれた。酒を飲まない人だから銚子を云つてくれないが、初對面なのにずゐぶん打ちとけて話をしてくれた。とても早口に喋る人だ。僕がウラジオにゐたときの話をすると、先生はペテルブルグへ留學中、コーカサスへ旅行したときの見聞談を聞かせてくれた。コーカサスには美少年が多いさうだ。モスコーのことも話してくれた。モスコーの街路は石だたみだから、馬車で走るとがらがら音がして煩いが、今ではその音が懷しいと云つた。ふと僕は、花外さんが酒に醉つて下宿の前の石だたみの路地で轉んだことを思ひ出し、兒

玉花外が僕の下宿の隣の部屋にゐるんだと云つた。今朝がた高等學校の生徒が校歌を歌ひに來た話もした。すると先生は一言のもとに云つた。

「あの老詩人、ますます昔の讀者を失望させてゐるね。いつそ富士見西行でも看板にしないかね。」

手きびしいと云ふよりも、云はでもがなの批判だといふ印象を受けた。對象は仕事を終つてしまつた老詩人ではないか。花外は花外であるのであつて、富士見西行を看板にするのは志の高い松尾芭蕉に任せればいい。

僕は鳥料理屋を出て肴町の停留所で先生に別れると、大事な原稿を預かつてゐるからまつすぐに下宿へ歸つた。玄關に入ると、同宿の園田が上り框に腰をかけて、すり剝いた手で下駄の緒をすげかへてゐた。

「喧嘩したのか」と聞くと、

「とんでもない、さつきまで花外さんと飲んでたんだ。轉んだんだよ。今日の花外さん、ぐでんぐでんだ」と云つた。

園田は二階の六疊の部屋に下宿してゐる貧乏畫家で、これはアルバイテンの店には關係してゐなかつたがアルバイテンの常連客であつた。この日は朝早く花外さんの部屋で校歌の合唱が起つたので、何ごとかと思つて行つて見ると三人の學生が起立して歌つてゐた。歌ひ終ると、學生の一人が紙包みをポケットから取出して花外さんの前に置いた。「これは甚だ輕少ですが、作詩をして頂いたお禮に持つて參りました。學校當局からことづかつて參りました」と云つた。紙包みには水引が掛けてあつた。

喜んだ花外さんは、「さ、出よう。そこいらでお茶でも飲まう」と學生や園田を誘つてアルバイテンへ行

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com